

P1-064

コロナ禍での中学生のメディア増加の現状 ～保護者アンケートから～

土路生 明美¹、鴨下 加代¹、林 優子^{2,3}、
坂本 千晶²、増田 久美子²

¹ 県立広島大学保健福祉学部保健福祉学科看護学コース、

² 県立広島大学保健福祉学部保健福祉学科作業療法学コース、

³ 県立広島大学附属診療センター小児科

【目的】

中学生がコロナ禍で受けた生活への影響を、メディア利用に焦点を当て明らかにし、With コロナ時代での中学生の支援を検討する。

【研究方法】

A 市発達障害者支援検討委員会と共同し、A 市公立中学校に通う子どもの保護者を対象に、子どもの現在の生活習慣、コロナ禍での子育て生活への影響等について Web アンケート調査を実施した。調査期間は令和 3 年 11 月～令和 4 年 1 月。分析は記述統計値を算出し、コロナ禍で子どものメディア（TV、スマホ、ゲーム）利用時間が増加した群（増加群）（n = 481）と、影響なし（対照群）（n = 131）とし、項目の関連はカイ二乗検定を行った。所属機関の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

回答者は 612 名（回収率 32.9%）で、母親が 90.1%、有職者は 87.7% だった。回答者の子どもは、現在運動しているが 27.1%、特別支援学級所属は 6% だった。現在のメディア利用 3 時間以上が 33.3% で、メディア利用増加群と対照群の比較では（36.4%、22.1%、 $p < 0.01$ ）と有意差が認められた。コロナ禍の影響では、子どもが運動不足（62.2%、47.3%、 $p < 0.01$ ）、保護者が精神的ストレスの増加（53.6%、40.5%、 $p < 0.05$ ）、保護者のメディア利用が増加（43.5%、6.11%、 $p < 0.001$ ）、コロナ休校時困った（79.4%、60.3%、 $p < 0.001$ ）で増加群が有意に高かった。保護者の子育て満足度との関係では、「子どもが運動している」で満足群 29.6% が不満足群 11.8%（ $p < 0.01$ ）と比べ有意に高かった。

【考察】

中学生のメディア増加が子どもだけでなく保護者の運動不足、保護者の精神的ストレスにも影響していることが明らかになった。内閣府調査（2020 年）で 3 時間以上のメディア利用の中学生は 39.2% と本調査と同様割合であった。コロナ禍で保護者のテレワークや中学生の ICT 教育がすすみメディアの利用時間の増加は今後も増えていくであろう。保護者は有職者が多く、コロナ休校は保護者の負担が増える可能性がある。子どもがメディアを適切に使用するために、家庭や学校において、メディア教育や適度な運動環境の整備などメディア以外の活動を増やす支援が必要である。

P1-065

ダウン症候群児への母親の関わりや育児支援に関する研究の文献レビュー

篠原 理恵

東京医療学院大学

【背景・目的】

ダウン症候群児は合併症を伴うことも多く、合併症の種類、程度もさまざまであり、個々の状況に応じた支援が難しい現状がある。その中で、母子関係構築に向けた早期支援の必要性があるとされつつも、どのような支援が必要であるか明確になっていない。そこで、ダウン症候群児への母親の関りや育児支援に関して、支援の現状と課題の示唆を得ることを目的に文献レビューを行った。

【方法】

文献検索は、PubMed、NLM、CINAHL、MEDLINE、CENTRAL、医学中央雑誌、Google Scholar によるデータベースから行った。検索対象期間：2011 年 1 月～2021 年 8 月、リサーチクエスション：Patient を Infants and mothers with Down syndrome、Intervention を Mother-child relationship support、Design を Clinical trial とし、Outcome、Control は限定せず広く文献を検索した。次に、介入した時期を設定した期間に該当するもの、検索した文献の引用文献やコクラン、システマティックレビュー内に含まれる文献などから検索した。

【結果】

はじめに 44 件の論文が得られ、次に、対象は乳児期からの母子に焦点を当て、学童期以降のみの研究や遺伝子・出生率に関する研究を除外し、全文入手できたものを精読した。最終的に本研究の主旨を含む 15 件の論文（国内文献 4 件、海外文献 11 件）が抽出された。研究内容は、母子のタッチング・遊びに関する介入研究（3 件）、乳幼児の言語の発達を促す教育介入研究（4 件）、母親の心理面への支援の研究（2 件）、育児などの情報提供に関する研究（3 件）、母乳育児支援の研究（3 件）であった。

【考察】

わが国においての研究は数少なく、ダウン症候群児をもつ母親への支援について、明確に示している研究も数少ないことがわかった。中でも、ダウン症候群の乳児のみの研究は少なく、母子コミュニケーションに焦点が当てられ、ダウン症候群児の成長・発達の促進が見られたものの、母子の関係性への変化は捉えにくいものであると考えられた。今後の課題として、情報提供内容や母乳育児を進めることへの困難性は明らかにされつつも、乳児期早期からどのような方法で支援を行うと良いのかなど具体的に示せるような研究が求められていると考える。